

本計画の基本理念、「読書」のとらえ方、基本的な考え方について

■ 基本理念

子どもは本来、好奇心旺盛な存在です。読書は、その好奇心を刺激し、感動や発見の喜びを子どもたちに与えてくれます。子どもたちは読書を通じて、言葉を学び、知識を得て、情報を的確に理解活用できる能力を育むとともに、自分の思いを表現する力や人を思いやる心を養い、多様な他者と関わり合いながら、自らの人生をより豊かに生きていく力を身に付けていくことができると考えます。

子どもたちが知りたい、触れたい、感じたいと思ったときに、すぐそばに本があること、本と子どもをつなぐ人がいること、そうした環境の整備を進めていきます。

子どもたちが、読書を通じて、言葉や知識を身に付け、表現力、想像力を養い、多様な他者と関わり合いながら、自らの人生をより豊かに生きていく力を育む

【参考】

「子どもの読書活動の推進に関する法律」

(基本理念)

第二条 子ども（おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。）の読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。

「武蔵野市子ども読書活動推進計画」

(計画の基本理念より抜粋)

子どもは本来、好奇心旺盛な存在です。子どもたちが知りたい、触れたい、感じたいと思ったときにすぐそばに本があること、また本と子どもをつなぐ人がいること、そうした環境や機会を作ることが求められています。子どもたちにとって、読書を通じて豊かな感性を育み、主体的に生きる力を身につけていくことが、これからの社会を生きていくために必要です。

「第2期 武蔵野市図書館基本計画」

(基本理念より抜粋)

読書ならではの楽しさや喜びを提供し、武蔵野市民が知りたいこと・考えたいこと・解決したいことを「知」の側面から支えていくために、図書館の力を高め、市民と地域の生き生きとした活動に貢献していきます。

「第三期 武蔵野市学校教育計画」

(基本理念)

自ら人生を切り拓き、多様な他者と協働してよりよい未来の創り手となる力を育む

■ 「読書」のとらえ方

読書のかたちは、読み物的な楽しみのための読書（目的としての読書）や学習のための、調べるための読書（手段としての読書）、あるいは目で活字を読む読書や幼い子たちが絵本を見る読書、読んでもらって耳で聴く読書があります。そして、この十数年間の ICT 環境の変化により、電子書籍やインターネットといった新たなメディア（媒体）が子どもたちにとってより身近な存在になりつつあり、これからを見据えると、これまでとは違う読書のかたちも視野にいれることが必要と考えられます。

そこで、本計画では「読書」を以下のとおり広くとらえ、そのうえで、子どもの発達段階や状況に応じた読書活動の推進に取り組んでいきたいと考えます。

文学（物語・小説）の楽しみは当然のこと、子ども自身が興味関心あることの探求、生き生きとした知的好奇心を満たす等のために情報を入手することを広く読書ととらえる。書籍のみならず図鑑や事典などに加えて、電子書籍やインターネット上からの情報入手も含むものとする。

【参考】第2回策定委員会での「読書」に関する委員の発言

- 「読書という言葉の捉え方・定義」は、課題というより、この計画をたてるうえで、明確にしなければいけないポイント
- 知的興味を掻き立てるものは十分読書と言えると思う。
- 幼い子たちが「読んでもらって耳から読書する」というのも、読書体験に違いない。
- 紙の本、電子書籍、インターネットなどメディア（媒体）で分けるのがよいのかどうか。例えば目的で分けると、「読み物的な楽しみのための読書」と「学習用の手段としての読書」、つまり読書自体が目的のもの、読書が手段になるものがある。
- 楽しみとしての読書・本を趣味とする人を増やすことだけを目標にするのか。学校図書館の観点で言うと、調べ学習でも本を利用するが、それも読書時間、読書環境の中を含めるのか。
- 「読書は好きか」「どのくらい本を読んでいるか」と聞くと、子どもたちは、その場合の「本」として、9類の物語的な本をイメージする。「本はあまり読まない」という子たちも、図書室に行けば自動車や虫など、興味があることに関する本を夢中でみている。しかし、それを「読書」とは思っておらず、「図鑑を見るのが好き」という。

■ 基本的な考え方

「すべての子どもの発達段階に応じた読書環境の整備」

- 読書のとらえ方を広くしたことで、子どもたちの発達段階に応じた、読書環境の整備とアプローチの仕方がより重要と考えます。
- 周りの大人から言葉を掛けてもらったり乳幼児なりの言葉を聞いてもらったりしながら言葉を次第に獲得するとともに、絵本や物語を読んでもらうこと等を通じて絵本や物語に興味を示すようになる乳幼児期には、本を媒介に子どもとのコミュニケーションが深められるような取り組みが何より重要と考えます。
- また、その後の成長においては、一人で本を読む、好みの本の傾向が現れ読書の幅が広がる、読書を将来に役立てようとするようになります。中高生頃からは、知的興味に応じ一層幅広く多様な読書ができるようになっていきます。その時々に応じて、手に取って読みたくなるような蔵書の充実や ICT を活用した情報活用能力の育成、居場所づくりが重要です。
- 家庭の状況や配慮の必要性の有無などに関わらず、すべての子どもが読書の楽しさに触れ、読書習慣を身に付けることができる環境整備を行います。

「市立図書館と学校、関係機関の連携による推進」

- 子ども読書活動の場は、家庭や幼稚園、保育園、地域施設、教育機関など多岐に渡ります。
- 本市における子ども読書活動の推進には、上記の様々な主体、関係機関との協力、連携が必要不可欠となります。
- 子ども読書活動の推進にあたり、市立図書館が中心となり、学校をはじめとする教育機関、保育施設、地域施設、その他関係機関と連携して、相互協力のもと事業を展開していきます。

「子どもの読書活動に関わる人材の育成」

- 子ども読書活動推進には、子どもと本をつなぐ人の存在が欠かせません。
- 市立図書館をはじめ、学校をはじめとする教育機関、保育施設、地域施設、その他子どもの読書活動に関わる施設等の人材について、研修、交流等により、知識や技術の向上、情報共有を図ります。
- 特に乳幼児期においては子どもの読書活動推進における家庭、保護者の役割が大きく、保護者への普及・啓発活動を継続するとともに、情報提供や利便性向上など支援体制を強化していきます。